

拡張と嚢胞状の拡張分枝膵管を認め IDUS で主膵管内に隆起性病変も認めた。2月17日膵管鏡目的に当科入院した。検査成績は白血球の上昇以外異常なかった。JF200を親スコープとし多用途細径電子スコープ CHF-BP260を用い膵管内の観察を行った。乳頭開口部は開大し細径スコープの挿入は比較的容易だった。主膵管内に魚の卵のような白色調の隆起性病変と発赤したイクラ様の隆起性病変を明瞭に観察できた。膵液細胞診は class III, 転院し膵体尾部切除術を行った。膵管内乳頭粘液性腺腫 (IPMA) と診断された。過形成性ポリープの性質を伴った乳頭状、管状の軽度異型を伴っていた。細胞粘液形質は MUC-2 陰性, MUC-5AC, MUC-6 陽性で胃型に分類され, Ki-67 軽度増殖を示し, p53 は陰性だった。IPMT の電子内視鏡像の報告は少なく貴重と考え報告した。

10 治療に難渋した膵仮性嚢胞の1例

玄田 拓哉・夏井 正明・姉崎 一弥
本間 照・関根 輝夫

県立新発田病院内科

症例は50歳代の男性。主訴は心窩部痛。3合30年の飲酒歴あり。CTにて膵頭部に径9cm, 膵尾部に径4cmの仮性嚢胞が認められた。膵頭部の嚢胞に対し一期的穿刺排液を施行, 症状の軽快と嚢胞の消失を得た。しかし膵尾部嚢胞は径16cmに増大, 一期的穿刺排液後も消失せず EUS 下膵嚢胞ドレナージ, 経乳頭的膵管ステント留置を行った。しかしその後遠残嚢胞消失せず感染を合併したため経皮経肝的にドレナージチューブを留置。感染症状は軽快したが, 連日100ml前後のアマラーゼ高値のドレーン排液が続き膵液漏の形成が疑われた。そこで Somatostatine analogue の投与を開始, 排液の減少と仮性嚢胞の消失を得て軽快退院した。ドレナージのみにて効果不十分の膵臓仮性嚢胞に対し Somatostatine analogue の投与が有用であった。

11 魚骨による食道潰瘍に縦隔気腫と縦隔炎を併発した1例

荒川 武蔵・米山 靖・滝沢 一休
池田 晴夫・岩本 靖彦・相場 恒男
和栗 暢生・古川 浩一・五十嵐健太郎
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

症例は88歳男性。主訴は胸部痛。2005年5月18日夕食時にクチボソカレイ摂食後から胸部痛出現。症状持続し21日悪寒・振戦出現。近医受診し上部消化管内視鏡検査にて胸部食道に魚骨を認め, 当院を紹介受診。緊急内視鏡検査施行し魚骨抜去。同日胸部CTにて縦隔気腫を認め, 発熱, 血液検査上の炎症所見と併せ縦隔炎と診断。禁食輸液とし抗生剤の点滴静注開始。経過中CTにて気腫の縮小を確認。入院6日目内視鏡下に潰瘍閉鎖を確認後, 食事再開。約3週間の経過で保存的に治癒した。魚骨による食道穿孔は発症早期から縦隔炎を合併する可能性があり, 縦隔気腫・縦隔炎除外のため積極的なCT検査が必要。

12 Barrett 食道潰瘍の1例

山田 明・阿部 要一・佐藤 秀一*
摺木 陽久*・横山 恒*

木戸病院外科
同 内科*

症例は81歳女性である。「最近嚥下障害ある」とのことで近医での食道胃透視を受け, 食道狭窄の診断を受けた。その2日後急激な腹痛をきたし当科を受診したが, 右閉鎖孔ヘルニアかんとんと判明し緊急手術を施行した。嚥下障害の検索目的で術後第6病日に上部内視鏡検査を施行した。頸部食道より14cmに亘る Barrett 食道を認め中部食道に比較的深い3cm大の潰瘍が存在した。生検では不完全腸上皮化生を認めた。また5cm長の食道裂孔ヘルニアを合併していた。Barrett 潰瘍と診断しオメプラゾール, マーロックスの内服治療を開始し症状の1時的改善を見たが, 1ヵ月後 Barrett 潰瘍の癒痕化に伴う狭窄をきたしたため拡張術を行なった。以後内服治療を継続し嚥下

障害なく、また Barrett 食道の悪性化所見も認めず経過観察している。

今回、最近の報告では稀な Barrett 食道潰瘍の 1 例を経験したので報告した。

13 高齢者食道癌に対し根治的化学放射線療法後に Salvage 手術を施行した 3 例の検討

牧野 成人・神田 達夫・羽入 隆晃
番場 竹生・坂本 薫・石川 卓
矢島 和人・田邊 匡・小杉 伸一
大橋 学・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【目的】近年、切除可能な食道癌に対しても根治的化学放射線療法（CRT）が積極的に行われている。特に高齢者に対しては侵襲が低い根治的 CRT を選択する傾向にあるが、癌の遺残などにより結果的に Salvage 手術を選択する場合がある。当科における高齢者の Salvage 手術について報告する。

【対象】70 歳以上で癌遺残（PR）に対する Salvage 手術を施行した 3 症例が対象。

【結果】3 例とも右開胸先行で、頸部郭清は施行せず、再建は後縦隔経路とした。全例致命的な術後合併症はなく、術後在院期間 44 - 49 日で元気に退院した。3 例とも肉眼的には完全切除（R0）であったが、2 例で病理組織学的に剥離断端陽性（R1）であった。

【考察】Salvage 手術は侵襲が大きいわりに完全切除率が低いことから、根治手術が可能な症例では高齢という理由だけで根治的 CRT とせず、手術も選択できることを十分に説明する必要がある。

14 胃嚢胞の 1 切除例

丸山 智宏・原 義明・西村 淳
清水 武昭・新国 恵也・河内 保之
平野謙一郎・小野寺真一・高橋 元子

厚生連長岡中央総合病院外科

胃嚢胞の 1 例を経験したので報告する。症例は 28 歳の女性で、主訴は心窩部痛であった。CT、MRI、上部消化管造影、胃内視鏡検査から、胃壁外に突出する胃体上部の粘膜下腫瘍と診断され、超音波内視鏡では充実性腫瘍が疑われた。GIST の可能性も考えられたため、胃局所切除術を施行する方針となった。切除標本では、腫瘍は軟らかい嚢胞性病変で切開を加えると内容は黄褐色粘稠の貯留物であった。病理所見では胃の粘膜下に胃壁構造を持った嚢胞を認めた。胃嚢胞は上皮性のもものとしては多発性びまん嚢胞症、胃重複症、各種ポリープに共存する嚢胞状腺管などがあり、非上皮性のもものとしてはリンパ管腫がある。今回の症例では、嚢胞は粘膜及び固有筋層の構造を持っており、胃重複症と考えられた。GIST の可能性も考慮し手術に至ったが、胃粘膜下腫瘍の鑑別診断として胃嚢胞も常に念頭に置く必要があると思われる。

15 Rabepazole にて *Helicobacter pylori* の三次除菌に成功した CYP2C19 het EM の 1 例

合志 聡***・青柳 豊**
津端 聖美***

三之町病院消化器科*
新潟大学教育研究院医歯学系
消化器内科学分野**
津端内科医院***

症例は 47 歳、女性。主訴は心窩部痛。既往歴：36 歳時より十二指腸潰瘍。

【現病歴】2003/6/25 GIF で胃十二指腸潰瘍が再発を認め、Omeprazole 20mg 内服。鏡検法で *Helicobacter pylori*（以下 Hp）陽性。8/13 Lansoprazole 60mg + CAM 400mg + AMPC 1500mg 7 日間の一次除菌を施行。9/30 心窩部痛出現し、十二指腸潰瘍（A2）の再発を認め、一次